

日本語未習・既習者ダイナミックを考慮した情意要因の研究
Anxiety and Motivation in First-Year Japanese: How True Beginners and Advanced Beginners
Affect Each Other

栗山恵子
インディアナ大学ブルーミントン
kkuriyam@indiana.edu

要旨

外国語学習者が経験する言語不安は、学習者要因に含まれる情意要因の一つとして第二言語習得研究に取り上げられてきた。先行研究においては、これまでに様々な不安要因が扱われてきたが、学習経歴の異なる未習者と既習者の言語不安を考慮した研究は少ない。本稿では、日本語学習者の不安を探究する研究の一環として、インディアナ大学ブルーミントンの日本語科一年生を対象に日本語未習・既習者ダイナミックを考慮した不安測定、期末試験の平均点と学習定着率の比較、インタビュー調査を行った結果を中心に、報告及び、考察する。調査の結果、不安度は先行研究と一致して、未習者の方が高く、期末テストの平均点は既習者の方が高かったが、既習者の方が多く学習を継続していることがわかった。又、今回の学習者へのインタビュー調査から、ある意味では特殊とも言える一年次・秋学期における教師の役割の重要性が改めて確認された。

キーワード: 言語不安、学習者要因、未習・既習者ダイナミック、アドバンス初級コース、FLCAS

はじめに

インディアナ大学ブルーミントンの日本語科では、日本語一年次・秋学期のクラスにおける日本語既習者数が増えている。08年度秋学期の始めに回収した学生情報記入シートをまとめたところ、日本語一年生・秋学期 (J101) に登録した 162 名の学生の内、83 名が日本語既習者、79 名が未習者であることがわかった。つまり約半数以上 (51.23%) の学生が日本語一年生に登録する以前に、日本語を学習してきたということになる。この様な状況がここ数年続いている為、同大学では 09 年の秋学期に試験的に日本語既習者を対象としたアドバンス初級コース (J110) を設けることになった。実際には、夏のオリエンテーションでプレースメントテストを受けた新一年生 22 名と生涯教育プログラムを通して編入してきた学部生 3 名の計 25 名が

J110 に登録した。一方、通常の日本語一年生・秋学期 (J101) には 145 名が登録したが、J101 を未習者だけに限ったコースにすることはできず、プレースメントテストを受けた結果、J110 に入れなかった 35 名の既習者達が 110 名の未習者達と共に J101 に登録した。

アドバンス初級コースでは、月・水・金の週 3 時間の授業日があり、「げんき 1」の教科書の 3 課から 6 課までを履修した。仮名文字導入はせず、教科書の 1・2 課の単語及び、文法項目も既習済みとし、実際の授業では、これらを復習項目として扱った。又、J110 の学生達は春学期に J101 の学生達と共に日本語一年生・春学期 (J102) に登録し、学習を続けた。

J110 が開講されたため、09 年度秋学期は J101 の既習者数を 08 年度の 51.23% から 24.13% (145 名中 35 名) に下げることが出来たわけだが、こういった学習環境で日本語学習者が経験する第二言語不安をデータに基づいて検討する必要があると考え、本稿では、未習・既習者ダイナミックを考慮した日本語学習者の不安を考察していく。まず、先行研究報告との比較をし、日本語学習者の不安の特徴を明らかにすべく、分析を行う。続いて、量的研究という考えから一歩離れて、質的研究によるデータ採集方法を取り入れ、日本語学習者 8 名を対象にインタビューを行う。更に、彼らが経験する不安とモチベーションの関連性を探るため、不安測定とモチベーション測定を実施し、それらのデータ分析を試みる。

先行研究

クラッシュェン が提唱する情意フィルター仮説は外国語学習者が経験する過度の不安は学習回避行動を引き起こし、第二言語習得にマイナスな影響を与えると示唆する。そこで、学習者が経験する不安は意欲、感情、モチベーション等の情意要因の一つとして第二言語習得の研究に取り上げられてきた。第二言語不安を測定する尺度も作成され、先行研究においては、Horwitz、Horwitz and Cope (1986) や MacIntyre and Gardner (1989, 1994) が開発した Foreign

Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS) や MacIntyre and Gardner Anxiety Subscales が用いられてきた。又、外国語学習者が経験する特定の不安要因の不安度を測る独自のテストも開発された(小河原 2001、元田 1999、Saito, Horwitz, Garza 1999)。

Young (1991) は第二言語習得場面での不安の特徴を明らかにし、3つの不安要因のカテゴリー、1)学習者要因、2)教授者要因、3)教授過程要因を据え、テスト不安、コミュニケーション不安、学習者のビリーフからくる不安等、様々な不安要因を提示した。学習歴の異なる未習者と既習者がお互いに及ぼす影響は、Young が示す学習者要因のカテゴリーに入り、個人内及び個人間から生じる不安として位置づけられる。未習者にとっては、既習者がいることで外国語を学ぶ上での自尊感情が持たず、競争状態に伴う不安が生じることもあるだろう。又、既習者にとっては、倦怠感からくる不安を感じたり、未習者であるクラスメートにいつか追い越されるのではないかという不安も生じるであろう。

第二言語不安は、これまで外国語を学ぶ上での様々な場面や学習過程を考慮し、研究されてきたが、未習・既習者ダイナミクスを考慮した研究は数少なく、Frantzen & Magnan(2005)と Fukai(2000)だけである(詳しくは栗山(2009)参照)。そこで、まず予備研究として、日本語一、二年に登録している学習者 213 名を対象にオンラインアンケート意識調査を実施した。その結果、88 名(回答率 41.3%)から回答が寄せられ、アンケートに答えた未習者 34 名中 21 名(63.6%)が一年生・秋学期の日本語クラスで「クラスメートである既習者達に圧倒された」と答え、既習者の 40 名中 17 名(42.5%)が「仮名導入時に時間を持て余した」と答えていたことがわかった。又、実際に日本語一年生を教えている教師達から寄せられたオンラインアンケート調査結果によると、回答者の約半数近くが「日本語一年生の秋学期は教えるに」と答えていたことがわかった。そこで、今回は Frantzen & Magnan にあるような FLCAS 測定に基づいた定量・分析的研究を行う必要があると考え、インディアナ大学ブルーミントンで始めてアドバンス初級コースが設けられたこともあり、続けて調査を実施した。又、Fukai の研究でも示唆されているように、第二言語不安の研究

においては質的研究があまり行われていないことから、日本語学習者を対象にインタビュー調査も行った。

調査

調査目的

本研究では Frantzen & Magnan の研究に踏まえて、日本語学習者を対象に未習者と既習者がお互いに及ぼす影響を考慮した不安の実証研究を行い、未習・既習者ダイナミクスから生じる学習者の不安を考察する。その上で、両者の期末筆記試験の平均点の比較、学習定着率の比較、質的調査としてインタビューを行う。

対象者

今回対象となったのは、量的研究においては、2009 年度秋学期にインディアナ大学のアドバンス初級コース(J110)に登録した既習者達 25 名と通常の日本語一年生・秋学期(J101)に登録した学習者 145 名及び、2010 年に日本語一年生・春学期(J102)に登録した学習者 136 名であった。尚、J101 に登録した学習者達の中にはアドバンス初級コースに入れなかった既習者が含まれている。又質的研究では、2009 年度の日本語二年生・春学期(J202)に登録していた 8 名が対象となった。

調査方法

調査 1 は量的調査として、J110、J101 及び J102 に登録した学生達を対象に FLCAS 測定を行った。FLCAS は Horwitz 等が開発した不安度を測る尺度で、第二言語クラスで学習者が経験するであろう不安徴候を反映するとされる 33 項目への回答を 5 件法で求める自記式質問紙法である。33 項目は「コミュニケーション不安」、「テスト不安」、「否定的評価に対する不安」の 3 種類の不安要因から構成されている(望月 2008)。これら 33 の質問項目への回答に対して SPSS 9.0 を用いた t 検定による統計処理を行った。調査 2 では、縦断的質的調査として日本語学習者 8 名を対象にインタビューを行った。調査 2 の対象者にも FLCAS 測定を二年連続行い、二年目に彼らの不安とモチベーションとの関連性を探るために Attitude Motivation Test Battery (AMTB) を用いてモチベーションの測定も行ってみた。AMTB は International AMTB Research Project として Gardner & Smythe (1981) が開発した ESL 学習者のモチベーションの度合いを測る尺度で、12 項目への回答を 7 件法で求める。本研究では知念(2004)の研究を参考に、AMTB 内の項目を大学生の日本語学習者向けに調整し、

大学生の回答者に不適当な項目を1つ除いた11の項目に回答してもらった。

結果と考察

調査1

調査1では学習者の学習経歴によって学習者の不安はどのように異なるのかを見るため、コース別及び既習・未習者別に不安測定を行った結果、以下のことが明らかになった(表1, 2参照)。

- 1) J101の学生を対象にした不安の比較においては未習者の方が既習者より不安が高く、両グループ間には有意差が観察された($t=-2.249$, $df=49$, $p<.029$) (表2参照)。
- 2) J110の学生を含めた既習者と未習者の不安の比較においても不安は未習者の方が既習者より有意に高かった($t=2.770$, $df=68$, $p<.007$) (表2参照)。
- 3) J102の学生を対象にした不安の比較においては既習者と未習者の間で有意な差がみられなかった($t=1.091$, $df=45$, $p<.281$) (表2参照)。

表1 コース別不安の比較

	J101	J110	J102
Sample size	51/57	19/21	47/59
Range (33-165)	46-127	44-114	47-120
Mean Score	85.00	77.00	82.61
Standard deviation	17.4	19.2	18.90
Mean Rating	2.77	2.52	2.69

表2 コース別既習者・未習者間の不安の比較

	既習者	未習者	p値
J101	N=14 76.42	N=37 88.24	$p<.029$
J101+J110	N=33 76.75	N=37 88.24	$p<.007$
J102	N=25 79.80	N=22 85.81	$p<.281$

上記の1)と2)はFrantzen & Magnanの結果報告と一致する。Frantzen & Magnanの研究では一年次・後期における不安測定は行われていないので、比較はできないが、3)にあるように春学期になって既習者・未習者間で不安度の有意差が見られなかった結果は非常に興味深い。何故

なら、既習・未習者間の不安の違いは一過性のものであると仮定できるからである。

期末筆記試験の比較は作文の箇所を除いたJ110の期末筆記試験とJ101の期末筆記試験の平均点を比べて行った。その結果、J110の期末筆記試験の平均点(56.75点)はJ101の期末筆記試験平均点(53.82点)より高かった(図1参照)。これもFrantzen & Magnanの研究結果とも一致する。又、学習の継続性を見るために、J110の既習者とJ101の既習・未習者の内、何名が引き続きJ102に登録しているのかを調査した。その結果、J110では25名中21名(84%)が継続し、4名(16%)がJ102には登録しなかったことがわかった(図2参照)。J101では既習者の35名中24名(68%)がJ102に登録し、11名(32%)が未登録であった。又、未習者の104名中57名(54%)が登録し、47名(46%)が未登録であることがわかった(図3参照)。

図1 J110とJ101の期末筆記試験の平均点の比較

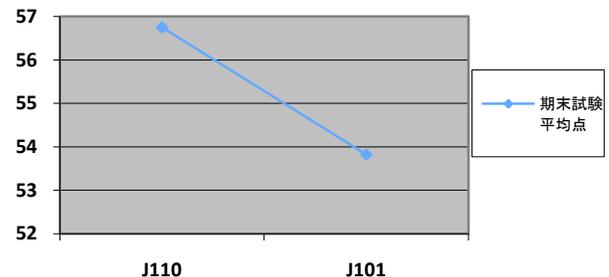


図2 J110における継続・未継続学習者数の割合

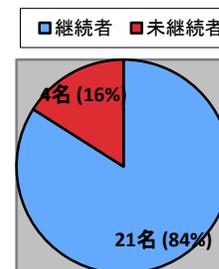
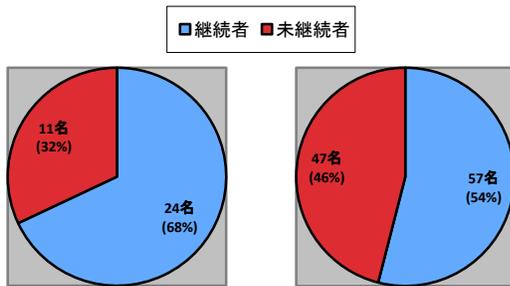


図3 J101における継続・未継続学習者数の割合
 既習者の継続・未継続者数の割合
 未習者の継続・未継続者数の割合



よって、J110 はもとより、J101 でも既習者の方が未習者より多く学習を継続しているという結果が得られた。これは Frantzen & Magnan の報告とは一致しない結果となった。その理由としては学習言語の違いが考えられるが、本学年度初めてアドバンス初級コースが開講されたことが原因となっている可能性もある。しかしながら、こう結論づけるには更なる調査が必要であろう。

調査 2

ここでは質的研究として 2009 年春学期に日本語学習者 8 名（既習者 4 名と未習者 4 名）を対象にインタビューと FLCAS 測定を行った結果と 2010 年春学期に縦断的に再度 FLCAS 測定を行った結果と AMTB 測定を行った結果を報告する。

インタビュー

日本語 2 年生 8 名を対象にした学習者への個別インタビューでは主に一年次秋学期の日本語クラスでの経験や当時のクラスメート及び、教師達の印象を話してもらった。まず未習者 4 名の内 1 名（学生 A）は既習者であるクラスメート達にかなり圧倒された事、なかなか仮名が覚えられなかったので非常に苦労したという経験を語った。しかしながら、この学生は教師が教室内で上手くコントロールしてくれたから、よかったと述べている。また 2 名の学生（学生 C と学生 D）は既習者達のことを少しだけ気になったということだった。また学生 C も教師が非常に援助的であったことが救いであったと述べた。未習者の学生 B は既習者達が全く気にならなかった事、既習者達がいることでかえって日本語学習へのモチベーションが上がったと述べた。この学生は状況をポジティブにとらえているせいか、不安感もスコアが 6.4 と低い。

既習者 4 名の内 2 名（学生 F と学生 G）は仮名文字導入字は時間を持て余したと述べ、特に学生 G はいつまでも仮名文字が読めないクラスメートをもどかしく思ったと語った。ところが 2 名の学生（学生 E と学生 H）は大学での仮名文字導入の授業は楽しく、もう一度基本から学べたのでよかったと述べた。特に学生 H は高校一年生の時に日本語の授業を受けただけで、3 年間のブランクがあったので、仮名文字導入の授業は役に立ったとのことであった。以上、日本語クラス内での経験や印象は学生の性格や過去の学習状況により異なっていたが、質的研究のデータ採集方法として、インタビューを採用したことで数値だけでは把握できない状況、グループ・データからは見えてこない個々の全体性をつかむことができた。又、インタビューから、不安を学習へのモチベーションと変えていく過程においては、教師が重要な役割を担っていることが改めて確認された。

FLCAS 測定・AMTB 測定

2009 年度に行った FLCAS 測定でもっとも不安度が高かったのは未習者の学生 C であった。不安度が低かったのは既習者の学生 E と未習者の学生 B である。09-10 年度に 3 年生として、日本語を続けた学生は 8 名中 4 名だけであった。興味深いことに、どの学生も上級に進んだためか、不安度は高くなっている。この結果は、スペイン語やフランス語といった他言語と異なり、日本語の場合上級に進むにつれ学習者の不安が高くなるという先行研究報告と一致する (Samimy & Tabuse 1992, Saito & Sammy 1996, Kitano 2001)。AMTB 測定であるが、11 項目を 7 件法で答えるため、モチベーションが最も高い場合はスコアが 77、最も低くて 11 ということになる。学生 A は今後、日本語を続ける意思はないと語ったことをよく反映しており、スコアが低く 40 となっている。残念ながら来学年度は日本留学を控えている学生のモチベーションは 57 とさほど高くはなかった。3 年間の日本語学習を終えた 4 名は皆、不安度が高く、一人を除いてはモチベーションも低いようである。今後は、更に不安とモチベーションの関連性を探究するため、グループ・データにおける統計分析に基づいた考察が必要であろう (表 3 参照)。

表3 学習者別 FLCAS 測定・AMTB 測定スコア

学生	既・未	FLCAS 測定 2009年3月	FLCAS 測定 2010年3月	AMT 測定 2010年3月
学生A	未	85	97	40
学生B	未	64	NA	NA
学生C	未	103	NA	NA
学生D	未	89	NA	NA
学生E	既	62	118	70
学生F	既	99	130	50
学生G	既	93	110	57
学生H	既	88	NA	NA
Theoretical range:		33-165	33-165	11-77

まとめと今後の課題

FLCAS 調査をもとに統計処理を行った結果、既習者と未習者の不安度の平均値の検定からは有意差が得られ、期末筆記試験の平均点は既習者の方が高かった。これらは Frantzen & Magnan の研究結果と一致したが、学習定着率に関しては、既習者の方が未習者よりも高いという結果が得られた。これは 2009 年度秋学期に同大学で始めてアドバンス初級コースを開講したことが要因となっているのかもしれない。いづれにせよ、今回の調査で、未習者達へのなんらかの配慮が必要であることがわかった。また 2010 年度春学期に行われた不安度の平均値検定で両者の間で有意差が得られなかった結果は、未習・既習者ダイナミックが及ぼす学習者不安への影響が秋学期だけのものであることを示しているようだ。また質的研究から不安度は、学習者の学習経歴だけでなく個人の性格にも左右されること、既習者達が未習者にとってモチベーションに成り得ること、教師の役割の重要性が再確認された。今回の調査は、オンラインで行われた為、アンケートに関心を持った学生達のみが回答してきた結果であり、回答率も高くない。よって、今後は全数調査の実施が望まれる。2010-11 年度も続けて、全数調査という型で、FLCAS 測定、AMTB 測定及び、縦断的な学習者へのインタビューを実施する予定である。

謝辞

本研究のデータ収集をするにあたって、多くの方のご理解とご協力をいただきました。インディアナ大学ブルーミントン日本語科一年生主任の松原美佐子先生、一年生担当の Associate Instructor の諸先生方、及び今回の調査に協力して下さった日本語プログラムの学習者の皆さんに心より感謝いたします。

参考文献

- 小河原義郎 (2001) 外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み・タイ人大学生の場合、世界の日本語教育、第11号、6月
- 栗山恵子 (2009) アドバンス初級コース開講にあたって：日本語未習者・既習者の意識調査報告、第21回中部日本語教師会発表論文集、149-162
- 元田静香 (2005) 第二言語不安の理論と実態、溪水社
- 望月道子 (2008) 複合環境における第二言語不安、外国語教育研究、第16号、10月
- Chinen Kiyomi. (2004) Heritage Language Development: Understanding the Roles of Ethnic Identity, Attitudes, Motivation, Schooling, Family Support and Community Factors. Unpublished doctoral dissertation, Carnegie Mellon University, Pittsburgh, Pennsylvania.
- Frantzen, D., & Magnan, S. (2005). Anxiety and the True Beginner-False Beginner Dynamic in Beginning French and Spanish Classes, *Foreign Language Annals*, vol. 38, 2
- Fukai, Miyuki (2000). Foreign Language Anxiety and Perspectives of College Students of Japanese in the United States: An Exploratory Study. *Japanese-Language Education around the Globe*, vol. 10, 21-41.
- Gardner, R.C., & Smythe, P.C. (1981). On the development of the Attitude/ Motivation Test Battery. *Canadian Modern Language Review*, 37, 510-525.
- Horwitz, E.K., M. Horwitz, & J. Cope. (1986). Foreign language classroom anxiety. *Modern Language Journal* 70, no. 2:125-132

- Kitano, Kazu (2001). Anxiety in the College Japanese Language Classroom. *The Modern Language Journal*, Vol. 85, No. 4.
- McIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1989). Anxiety and second-language learning: Toward a theoretical clarification. *Language Learning*, 39, 251-275.
- McIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1994). The subtle effects of language anxiety on cognitive processing in the second language. *Language Learning*, 44, 283-305.
- Samimy, K.K & Tabuse, M. (1992). Affective variables and a less commonly taught language: A study in beginning Japanese classes. *Language Learning*, 42, 377-398.
- Saito, Y., & Samimy, K. K. (1996). Foreign language anxiety and language performance: A study of learner anxiety in beginning, intermediate, and advanced-level college students of Japanese. *Foreign Language Annals*, 29, 238-251.
- Saito, Y., Horwitz, E.K., & Garza, T.J. (1999). Foreign language reading anxiety. *Modern Language Journal*, 83, 202-218
- Young, D. J. (1991). Creating low-anxiety classroom environment: What does language anxiety research suggest? *Modern Language Journal*, 75, 426-439.